

石垣 理子 (昭和女大)

【目的】衣服設計のための研究実験データを実際の衣服デザインに生かすひとつの試みとして、本来体型観察などを目的とする体表展開図を、衣服デザインの発想の手掛かりとするとともに衣服パターンとしても直接利用することで、新しい衣服製作の手法の可能性について検討した。

【方法】スライディングゲージにより体幹部の3次元データを採取し、四角形を1単位(ピース)とした胴部および腰部原型風の体表近似展開図をパーソナルコンピュータで作成する。これを基本として各ピースの位置関係を変えることなく、視覚的効果を考慮して接続のバリエーションを作成し、衣服デザインおよびパターンとして利用した。実際の手順は次のようである。①あらかじめ2次元でピースの接続バリエーションを考えておく。②それをもとにデザインをおこす。③デザインに合わせ必要があれば、ピースの接続法に修正を加え衣服用のパターンを作成する。④代表的であると思われる数点について、実際に衣服作品として製作を行う。

【結果】今回の方法を用いることで、次のような利点が考えられる。

1. 基本となる体表展開図が体型の情報を豊富に含んでいることから、①補正の必要が殆どない。②高度な専門知識がなくても衣服パターンとしての利用が可能である。③体型差による特別な配慮をしなくても、同じデザインのパターンが比較的容易におこせる。
2. 四角形の接続バリエーションというデザインソースがあることで、衣服デザインとしてのアイデアに結びつきやすい。